

歐米の河川を視察して

竹下健次郎

河川を見ればその国の水質公害の実情がよくわかるだろうと思い、私は昨夏の（初めての）外国旅行の焦点をそこに置いた。日本を離れて最初に見ることのできた河はロンドンを流れるテムズ河であった。この河は、今から百年以上も前からすでに石炭化学工業の犠牲となり、汚れに汚れた河と聞いていた。しかし、私の眼に映ったテムズ河の水質は「まあまあ」という感じであった。たしかに、テムズは汚ない泥水ではあったが、タール系の工場排水による汚濁の形跡はほとんどなかったし、豊かな水量を利用して上下する200トン級の運送船をみていると、むしろ活気に溢れた大英工業国の巻き返しさえ感じられた。

西ドイツに入った私は、ライン河の汚濁状況が予想以上にひどいのに驚いた。昨秋天皇皇后両陛下がヨーロッパご旅行の際ご覧になられたというローレライの水域は、欧洲特有の単なる泥水にすぎなかつたが、モーゼル河がそぞろコブレンツ付近からは急に工場による汚濁の様相を呈していた。「ラインはずいぶん汚っていますね」という私の感想に対して、「ルール川を見てください。ドイツ人は川をきれいにしようと努力しています。しかし、フランス人が上流（モーゼル河）を汚しているのでいかんともしようがないのです。」といって、あるドイツ人の技師は笑った。

ドイツ人が川を大切にしていることは、たしかに私自身も経験した。8月末の日曜日、秋はミュンヘンで晩夏の一日を静かに過ごしたが、ドナウ河の支流というイサール川の水質をみるために、地図をたよりにリヒテンブッヒ橋というところで川辺におりた。ところが驚いたことには、そこの川原には沢山の若い男女が水着姿で日光浴をしていた。中には泳いでいる者もいた。川で泳ぐということは私も少年時代に経験したが、今の日本において、しかも百万都市の中を流れる川において、水浴のできる川が一体あるだろうか。私はその川の岸に沿って約5キロほど散策したが、直径50cm以上の木の並木道があり、沢山の小鳥がさ

えずっていた。少し疲れてベンチに腰かけていると、犬を連れた一人の上品な老婦人が小鳥に餌を撒きながら通り過ぎて行った。まさに一幅の絵を見ているようであった。そして那阿川のあの情ない川岸を思い浮かべて悲しくもあった。さらに驚いたことには、イサール川の下流に行くほど自然の浄化作用がよくおこなわれて、水質はますます良くなっていた。

このように、川の岸辺に木の並木歩道があり、川を大切にしているという印象は、パリーのセーヌ河でも同様であった。かつてナポレオンが「俺の骸をセーヌの川畔に埋めよ」と遺言したというアンパリッド付近の川岸は、アレキサンダー3世橋の偉大なデコレーションの風格と共に、すばらしい一語につきる。ただ残念ながら、セーヌ河の水質そのものはかなり悪く、川岸の美観と汚れた水質とがアンバランスであり、ここでも水質公害の悩みを隠せなかったようだ。

スイスの川はさすがに美事な水質を保持していた。ユングラウヨツホからインターラーケンに流れる渓谷の川は、その名のとおり、*weiss-Luft Strom* という牛乳のような真白い川であり、またそこからベルン市へ流れるアーレ川は一変してエメラルドのような緑色を呈し、あまりの美しさに、私はその川の水を小びんに掬みとって日本まで持ち帰った。

イタリアでは、ミラノ市から約1時間ドライブ、ポー河とテミノ河との合流点を視察したが、予想に反して工場排水による汚染の形跡はほとんど認められなかった。しかし、イタリア人の川に対する感覚は日本人とよく似ているように思われた。それは、ローマ市を流れる殺風景なテレベ河を見た時の私の実感でもあった。イタリア人は川を大切にしない国民のようである。もし、イタリアが日本のように工業立国となった場合は、公害に悩む現在の日本の轍を踏むことであろうと思いつつ、イタリアを去った。

アメリカに渡った私の第一の印象は、「よくも

こんな大国と戦争をしたものだ。ということであった。ニューヨークを流れるハドソン河はまるで海の如く、空から見たミシシッピー河は大蛇のようであった。オハイオ河を視察した後、U.S.スチールのP技師に対し、「アメリカの河はきれいですね」というと、「いや、最近は全く汚くなりましたよ。」といって首をすくめた。クリーブランドでは、「エリー湖は水銀によって汚染され、死の湖となりました。」とL社の青年技師は恐縮し、そのためかエリー湖の視察案内を拒否した。

アメリカの河は本質的に赤い泥水であるから、工場排水による汚染の色なのか、本来の水質なのかはよく見なければわからないが、私の見た限りでは、ヒューストンを除いてはまだまだ羨やましい河をもつ国である。

そのアメリカですら、1981年までには河川の汚濁を絶滅して、"All rivers Fishing"とするマスキー法案が議会をパスしたと聞く。

日本では、昭和42年に公害対策基本法が成立し、ついで大気汚染防止法、水質汚濁防止法ならびに騒音規制法の三つの法律がようやく制定されたが、要は法律でもなく罰則でもない、日本人が本当に世界を歩き切れるようになるためには、まず川を大切にするという道徳心から始めなくてはなるまい。

九州大学生産科学研究所教授
工学博士
福岡県公害対策審議会委員